

# 和歌文学の十年

岩津資雄

私は本学文芸科の「日本文学特講」の一つとして、和歌文学の講義を週一回担当してから、今年で満十一年になった。十年一日とか十年一昔とか言われるが、それはとにかく、この老骨の講義も十一年間続けてみるとその間にはさすがにいくらかの工夫があり、それに伴なう様変わりもあつたはずである。今それらを振りかえってみると多少の感慨なきをえない。

初年度の講義には、秋州道人・会津八一の歌集『鹿鳴集』（文庫本）をテキストに選んで講読した。この歌集はいつかは一度教室で講読してみたいと思つていたが、さいわい学生数が少なく、ゼミナールのような雰囲気の中でその講読ができた。始め学生たちにとって会津八一も『鹿鳴集』も、およそ無縁の存在らしかったが、次第に学生たちはその人物と作品に興味と関心を示すようになった。

申すまでもなく会津八一は美術史学者・書家・歌人の三者を兼ねた三絶の人とも称された程の人物である。その『鹿鳴集』には奈良大和の風物や古美術に取材した短歌が多く、そこに歌人八一独自の歌風が發揮されていた。

しかも『鹿鳴集』のうちの九首までが八一の自筆による歌碑となつて、今も奈良大和路の其処彼処に建立されている。そうした魅力もあつてか、学生たちの中には夏休みなどに奈良見学に向く風潮が現われてきた。それは教室内の輪講の中にも窺われたが、その目立ったのは学年末の提出レポートだった。あの一冊には幾人かの学生が、カメラで捉えてきた奈良の風物や歌碑の写真が貼りめぐらされ、思い思いの印象や感想が書き込まれていた。見るからに珍らしい合作のレポートとして、返却せずに手許に残しておきたいものだった。

二年度の講義には学生数が増加した関係もあつて、小著『短歌——古典と近代』のテキスト版に当たる『和歌文学』を採用した。『短歌——古典と近代』のほうは万葉集・古今集・新古今集に代表される古典短歌と明治以降の近代短歌との四大歌風の時代的特質を、相互間の類似作品（類歌）の比較によって具体的な把握を試みたものであるが、その資料となる類歌を歌合せの方式に做つて組み合わせるのが『和歌文学』である。この『和歌文学』のほうも当時すでに絶版となつていたので、その一部分を文芸科の助手さん達の手でプリント版にして貰つて使用した。講義の内容が『短歌——古典と近代』の要領に準じたことは申すまでもない。

『和歌文学』による講義を三、四年度続けた後、趣向を変えて小編著の影印本『古今集序と天徳歌合』の講義に切り替えた。この影印本は古写本の読解を兼ねて古歌論の講義を行なおうとの趣旨から編集したもので、当時私が兼任していた某女子大の国文科で採用していたのを、本学でも試みてみたのである。変体仮名や草体漢字の多い古写本の読解はどうかとも懸念したが、その底本には比較的に癖のない書体のものが選んであり、それに古今

集序も天徳歌合も現行の活字本があるところから、存外学生たちも読解に困らないように見受けた。むしろ古書体の文字に好奇の眼を輝やかせたり、その答案や氏名の文字には変体仮名が交るようになされた。

影印本による講義を三、四年度で打ち切り、翌年度からは又以前の『和歌文学』による講義に戻った。幾分の変り映えとしては、講義時間の一部を割いて作歌演習を加えたことである。作歌演習を加えたのは学生たち自身で作歌の体験を通して和歌文学を身につけたい、それには作歌演習が刺激剤にならうかと思いついたからである。作歌演習といっても制限のある時間内では、その真似事に過ぎない。あらかじめ有志の学生たちに自作の短歌を用意して貰って、講義時間にそれを板書しておいて貰う。それを対象にして級友たちが自由な感想を加える、私もそれに加わって批評や添削を試みる、というような遣り方である。遣り出した当初には肝心の板書作品の提供が少なく、演習の体をなさなかったが、近年は板書作品の増加に伴なって演習回数も頻繁になってきた。これを作品提供者の回数から見ると、昨年度にはクラスの全員に行きわたり、今年度には既にそれが一人当たり二

回から三回にも及んでいる。

さて、これらの演習作品の出来映えはどのようなものであろうか。試みに今年度の演習作品の中から、自作自選の一首ずつを提供して貰ったから、それを次に掲げておく。掲げたのは全員十七名のうち三人の未提出者の分を除いた十四人の作品、言わば小倉山百人一首ならぬ「旗の台十四人一首」である。

咲き出でし木蓮の花を教へつつ羽をやすめるものしる蝶よ  
二年 塩田 直子

いかにせん父母の心のつられれど我が志捨て去りがたき  
二年 笛田真由美

夕映えの色に染まれる砂浜にますほの小貝寝みとほるらん  
二年 中村 昌子

若き日の夢をいだきて由比ヶ浜水底深く鎮まりますか  
一年 石尾久美子

肌寒き夕べの空に見ゆるかな三日月のかげ紅くかすみて  
一年 伊藤 容子

秋晴れの空に現はれ出でし富士その真白きに歩みとどめつ  
一年 植村 美香

霜柱踏む頬赤き子供らの声すきとほる冬の朝かな  
一年 大井 恵子

秋雨に濡れて紅葉の散りゆけば冬のおとづれ待たばかりなる  
一年 大島由起子

ビルの谷間流るる川の音たてず栖む水鳥の姿も見えぬ  
一年 尾形 美和

いつしかも色づきそめし紫陽花の姿見れば梅雨近づきぬ  
一年 篠田 佳枝

鈴懸の枯葉の肩に触れしとき並木の路を君の軀け来る  
一年 西宮由美子

満員の電車にひとり通ふ子の見え隠れしてランドセル見ゆ  
一年 鈴木 美和

やはらかき陽ざしの我にさしこめど身を凍らしむ晩秋の朝  
一年 松原みさ子

バスを待つ身に沁む風の冷たきに吐息の白し冬は来にけり  
一年 三上由香里

附言——以上の演習作品は私の選出したものではないが、作歌演習の場では誤字や語法に訂正を加えたり、改作を促したりしたのも交っている。因みに、私はかつて女子高校生向けの某月刊雑誌に投稿短歌の選を担当していたことがある。その場合、入選作品ともなるとかなり思いついた添削を加えたものだった。それには私自身の若気の気負いもあったようだ。しかし今度の演習作品の場合にはそれをさし控えた。なるべく原作を尊重して、学生たちの作歌力のありようを紹介した積りである。そこにも私として十年一昔の感慨が絡んでいる。

(五十九年一月)